



キャンパスにてコーラス隊と  
(前から2列目、右から2人目が筆者)

本の大学へ進み、三菱電機に就職した。以来、多重化装置、センサネットワーク等々、情報通信の研究開発を行ってきた。日本企業で子育てや老人介護をしながら仕事を続けることには苦労もあったが、幸いなことに、紳士的な社風に助けられ、キャリアを積むことができた。また、研究成果を論文にまとめ、博士号の学位も取得した。

私が専門としている情報通信の研究開発の分野では、グローバルなインターネットや携帯電話の爆発的な普及等、急速な発展が続いている。また、それにもなうセキュリティ脅威等の数々の課題も出てきている。このよ

うな状況のなかで最先端の研究開発を行うためには、高度な技術力と英語力は必須である。それに加えて、世界の産官学の研究者との交渉力、新たな分野を切り拓く能力が必要とされる。日本の産官学界は慣性が強く、方向の定まったベクトルに沿って内容を深めるのは大得意であるが、今まで存在しなかった分野の開拓、世の中のニーズに合わせた方向転換はやや苦手である。そこでグローバルな学界への参加が必要となる。より良い技術を求めて協力と競争を繰り返す研究者の心は世界共通である。しかし、米国を中心とする先端グループ内部で盛り上がっているディスカッションに、傍観者としてではなく、仲間として参加するためには、国際的な社交性とパランス感覚が要求される。このような時こそ、国際理解と新規開拓のピアソン・スピリットが役立つことを痛感している。

これからも、日本が技術大国として、韓国や中国の後塵を拝することなくアジアのリーダーシップをとり、環太平洋地域の安全と発展に寄与していかれるよう研究開発活動を行っていききたい。

最後にこのような貴重な経験を支えてくださったUWC日本協会、日本経団連会員企業の皆様に心から感謝申し上げますとともに、UWCがますます発展し、今後も多くの若人がこのような機会を得られることを祈っている。

## 中央公論 7月号 発売中!

特別定価 900円(税込)

〒104-8320 東京・京橋2-8-7 中央公論新社  
TEL 03-3563-1431

---

### 次の10年、警告のシナリオ

米中「同盟」の狭間に消える日本

近未来シミュレーション 日本喪失の時代 如月 遼  
 日米同盟の命運を徹底検証する 岡崎久彦×孫崎 亨  
 米中経済G2時代の到来 大橋英夫

民主党のゆくえ 伊藤惇夫 菅 直人ほか

---

**特集** ネット時代の「罪と罰」 亀山郁夫×平野啓一郎ほか

---

磯田道史の江戸散歩 北の核暴走、盧武鉉自殺 池東旭/佐藤 優

# グローバルな

## 情報通信研究開発の場で

一九七〇〜七九年UWCピアンソン・カレッジ  
(カナダ)留学。八五年東京大学工学部電気工  
学科卒業。同年三菱電機入社、現在に至る。  
二〇〇一年東大にて工学博士号を取得。

海外留学に漠然と憧れていた高二の春、高校に送られてきた奨学生募集の案内に駄目もとで応募、合格通知に驚いた先生が、大声で教室に知らせにきてくれた。九月には、大勢の友人に見送られ羽田から旅立った。成田空港開港の前年であった。

### 👉キャンパスライフ

初めての海外では見るもの聞くもの珍しく、人、木、野菜等あらゆるものが大きく、豊かなカナダの生活に、小柄な私は圧倒された。英語も最初はよくわからず、日々の生活の仕組みを習得するのが一苦労であった。さらに、文化体験が主目的の一般の高校留学制度と異なり、学力レベルが高く、さらに日本の高校とは異なり、大学並みの自主性が必要なカリキュラムをこなすことが、あたりまえであった。電話帳のように分厚い各科目の教科書の、最初の部分を次の授業までに読んでくるよう



三菱電機 情報技術総合研究所  
主席技師長 河東晴子  
かわひがし はるこ

に言われ、辞書を引きながらやっと読み終えたところが、実は内容とは直接関係ない前書きの序章だったのも、懐かしい笑い話である。一方、世界中から集まった才能とやる気にあふれる学生達は、人間的にも魅力的な人ばかりであった。体格が大きいだけでなく、精神的にもマチュア(大人)で、友人の何気ない言葉が、今でも含蓄深いものとして思い出される。

### 👉かけがえのない体験

社会奉仕活動の海岸救助隊では、レスキューボートを自作し、海に出て訓練をした。プールの沿岸警備隊の太平洋岸の基地で合宿をしたときは、夜間捜索訓練で被害者発見が非常に困難なことに驚いた。また、入り組んだ島々の間を小型ボートで走り、大洋の透き通った波を間近に見て、カナダの自然の美しさを満喫した。

●(社)ユナイテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四二四名の卒業生を輩出している。

夏休みには、外国語でとっていたスペイン語の練習のため、カナダ人の友人とともに、スペイン語の先生の故郷ウルグアイの高校に短期留学し、ピアソンの友人を訪ね歩いて南米縦断旅行をする機会に恵まれた。当時政情不安定で戒厳令下のペルーでは、銃を構える兵士の間を縫って友人宅を目指したことが、アルゼンチンではワールドカップサッカー優勝の時に行き当たり、お祭り騒ぎのなかで、友人二人とともに地元テレビに出たことは、楽しい思い出である。これらの経験をともに、北米・南米・日本の文化比較をスペイン語でまとめ、夏休みの課題論文としてピアソンに提出した。

ピアソンでは、国境を越えても変わらないことと、国境を越えると意味を持たなくなることもあることがわかり、その後の人生では、普遍的に価値のあることに照準を合わせることを心がけている。

### 👉ピアソンの経験をいかに

卒業時は米国大学進学のももだったが、日